

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか  
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜  
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。  
 爾 歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う  
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ  
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ち の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び  
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い  
 全 世 界 の 爲 生 命 を 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。  
 三 者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き  
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が  
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に な ん ち を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 な ん ち は は じ め わ が く に に お い て お の  
 爾 は 初 我 國 に 於 己

れ を が い ら い し ゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト ス の  
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
今 此 教 會 爲 祈

たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 復活のコンダク 第6調 】

いまもいつうもよよに、アミン。  
今 何 時 世 世

いのちのげんいたるハリストスかみはいのちを  
生 命 原 因 神 生 命

ほどこすてをもつてしせしものをくらきた  
施 手 以 死 者 の 暗 谷

によりいだして、ふくかつをじんるいに  
出 復 活 人 類

た ま え り 、 し ゅ う じ ん の き ゅ う せ い し ゅ 、 ふ  
 賜 衆 人 救 世 主 復  
 く か つ と い の ち 、 お よ び し ゅ う じ ん の か み な  
 活 生 命 及 衆 人 神  
 れ ば な あ り 。

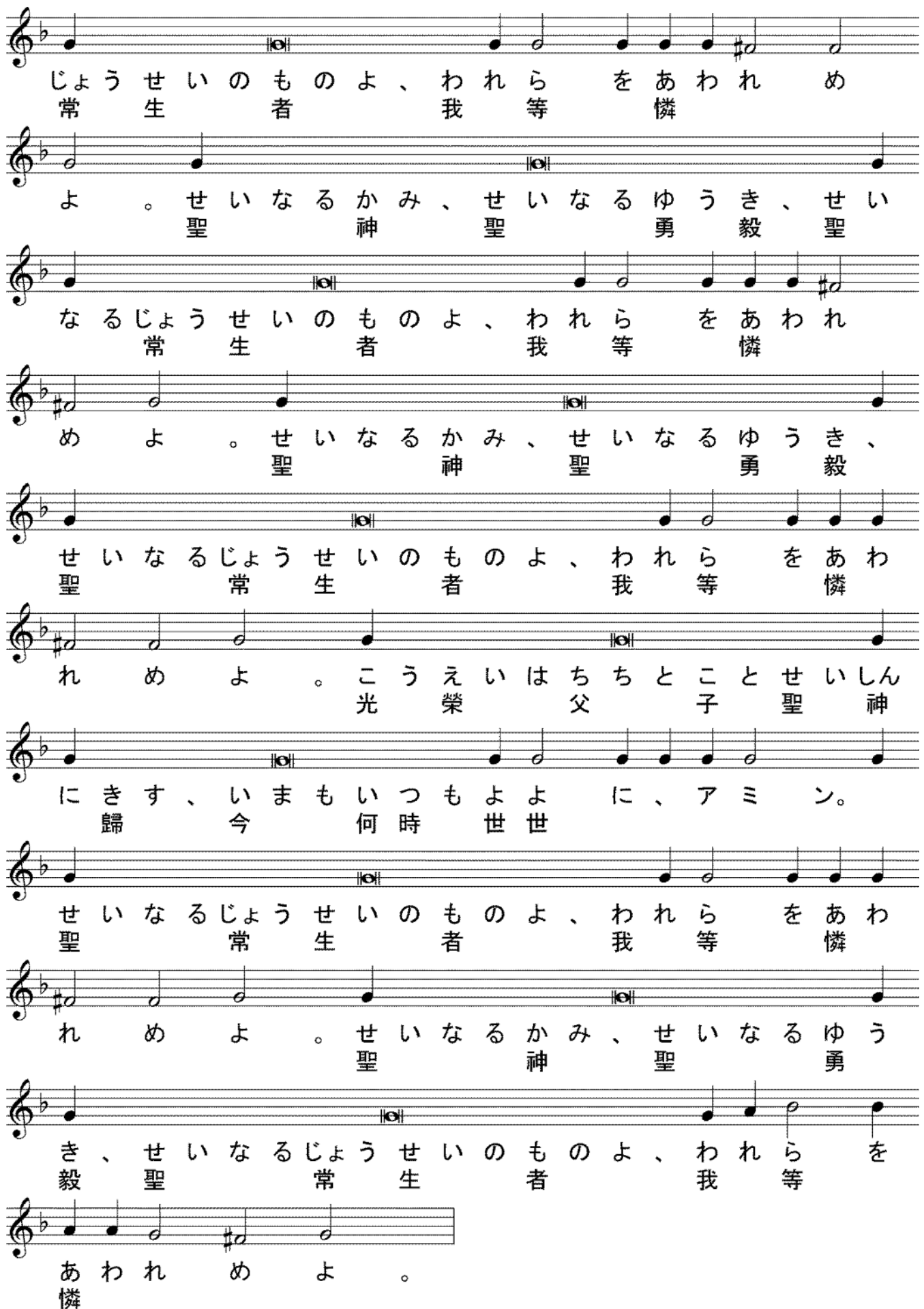
司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
 聖 神 聖 勇 毅 聖



じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
 常生者我等を憐  
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖神聖勇毅聖  
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
 常生者我等を憐  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖神聖勇毅  
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖常生者我等を憐  
 れめよ。こうえいはちとことせいしん  
 光榮父子聖神  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸今何時世世  
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖常生者我等を憐  
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖神聖勇  
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 毅聖常生者我等を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうぎ あ つね あが ほ いま いつ よよ  
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第6調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん  
慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん  
爾の神にも、

司祭) えいち  
睿智、

誦經) プロキメン、しゅう なんぢ たみ すく なんぢ ぎょう ふく くだ たま  
プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅうよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
主 爾 民 救 爾 業  
ふくをくだしたま あえ。  
福 降 給

誦經) しゅう われなんぢ よ われ かため わ ため もだ なか  
主よ、我爾に呼ぶ、私の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅうよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
主 爾 民 救 爾 業  
ふくをくだしたま あえ。  
福 降 給

誦經) しゅう なんぢ たみ すく  
主よ、爾の民を救い、

なんぢのぎょうにふくをくだしたま あえ。  
爾 業 福 降 給

【 アポストロス 使徒經 220端 エフェス書2章4節~10節 】

司祭) えいち  
睿智、

誦經) せいしと じん たつ しよ よみ  
聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) つつし き  
謹みて聽くべし、

誦經) けいてい あわれみ と かみ そのわれら あい おおい あい よ われらつみ よ し  
兄弟よ、矜恤に富める神は、其我等を愛する大なる愛に縁りて、我等罪に由りて死

<sup>もの</sup>せし者を<sup>とも い</sup>ハリストスと<sup>なんぢらおんちよう</sup>偕に<sup>もつ すく</sup>生かせり、<sup>かれ</sup>爾等<sup>とも</sup>恩寵を<sup>ふくかつ</sup>以て救われたり、<sup>かれ</sup>彼と<sup>とも</sup>偕に<sup>ふくかつ</sup>復活せしめ、<sup>あ</sup>ハリストス・<sup>てん</sup>イイススに<sup>ざ</sup>在りて<sup>みらい</sup>天に<sup>よ</sup>坐せしめたり、<sup>おい</sup>未來の<sup>その</sup>世に<sup>お</sup>於て、<sup>その</sup>其<sup>あ</sup>ハリストス・<sup>われら</sup>イイススに<sup>ほどこ</sup>在りて<sup>じんじ</sup>我等に<sup>もつ</sup>施し<sup>おんちよう</sup>仁慈を<sup>あふ</sup>以て、<sup>とみ</sup>恩寵の<sup>しめ</sup>溢れたる<sup>ため</sup>富を<sup>けだし</sup>示さん<sup>けだし</sup>爲なり。蓋  
<sup>なんぢら</sup>爾等<sup>おんちよう</sup>は<sup>もつ</sup>恩寵を<sup>しん</sup>以て<sup>よ</sup>信に<sup>すく</sup>由りて<sup>こ</sup>救われたり、<sup>なんぢら</sup>是れ<sup>よ</sup>爾等に<sup>あら</sup>由るに<sup>かみ</sup>非ず、<sup>たまもの</sup>神の<sup>たまもの</sup>賜なり、  
<sup>おこない</sup>行に<sup>よ</sup>由るに<sup>あら</sup>非ず、<sup>ひと</sup>人の<sup>ほこ</sup>誇る<sup>ため</sup>こと<sup>けだし</sup>なからん<sup>われら</sup>爲なり。蓋<sup>おこない</sup>我等は<sup>もの</sup>彼の<sup>もの</sup>造りし<sup>もの</sup>者にして、<sup>もの</sup>ハ  
<sup>あ</sup>リストス・<sup>よ</sup>イイススに<sup>わざ</sup>在りて<sup>ため</sup>善き<sup>つく</sup>功の<sup>すなわち</sup>爲に<sup>われら</sup>造られたり、<sup>おこな</sup>即<sup>ため</sup>神が<sup>ため</sup>我等の<sup>ため</sup>行<sup>ため</sup>わん<sup>ため</sup>爲に、  
<sup>あらかじ</sup>預<sup>そな</sup>め<sup>ところ</sup>備えし<sup>ところ</sup>所なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし—あなたがたの救われたのは、恵みによるのである—キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜った慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。

\*\*\*\*\*

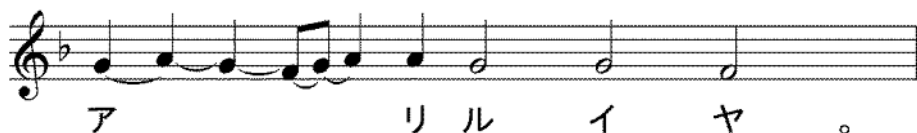
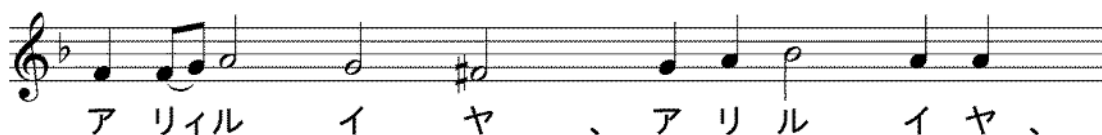
【 アリルイヤ 主日第6調 】

司祭) <sup>なんぢ</sup>爾に<sup>へいあん</sup>平安、

誦經) <sup>なんぢ</sup>爾の<sup>しん</sup>神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しじょうしゃ</sup>至上者の<sup>おおい</sup>覆の下に<sup>した</sup>居る<sup>お</sup>者は、<sup>ぜん</sup>全能者の<sup>うしや</sup>蔭の下に<sup>かげ</sup>安んず、<sup>した</sup>やす

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、  
ア                    リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>しゅ い なんぢ われ かくれが われ ふせぎ われ たの ところ われ かみ</sup> 主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が頼む所の我の神なりと、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、  
ア                    リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書38端 8章26~39節 】

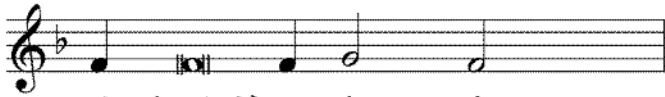
司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

なんぢの し んにも 。  
爾 神

司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、 こう え い は なんぢに き し 、 こう え い  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮





は なんぢに き す 。  
爾 歸

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聴くべし、<sup>か と き</sup> 彼の時 <sup>むか</sup> イススが <sup>ち き た</sup> ガリレヤに <sup>かれ き し の ぼ</sup> 對えるガダラの地に來りて、彼が岸に登

<sup>とき まち ひとり ものかれ むか</sup> りし時、邑の一人の者 <sup>すなわちひさ</sup> 彼を迎えたり、乃 <sup>まき よ</sup> 久しく <sup>ころも き</sup> 魔鬼に憑られ、衣 <sup>いえ す</sup> を衣ず、家に住ま

<sup>はか す もの こ ひと み さ け</sup> ずして、墓に住める者なり。此の人 <sup>かれ まえ ふふく おおい こえ もつ</sup> イススを見て <sup>い</sup> 號び、彼の <sup>しじょう</sup> 前に <sup>かみ こ</sup> 俯伏し、大 <sup>われ なんぢ なん あづか</sup> なる <sup>なんぢ もと われ くる</sup> 聲を以

<sup>い</sup> て曰えり、至 <sup>おき こ ひと い めい</sup> 上なる神の子 <sup>そのかれ とら</sup> イススよ、我と <sup>ひさ</sup> 爾と <sup>なか</sup> 何ぞ <sup>けだし</sup> 與らん、<sup>おき こ ひと い めい</sup> 爾に <sup>そのかれ とら</sup> 求む、<sup>ひさ</sup> 我を <sup>なか</sup> 苦し

<sup>なか</sup> むる <sup>おき こ ひと い めい</sup> 勿れ。蓋 <sup>そのかれ とら</sup> イススは <sup>ひさ</sup> 汚鬼に <sup>なか</sup> 此の人 <sup>おき こ ひと い めい</sup> より <sup>そのかれ とら</sup> 出づる <sup>ひさ</sup> を <sup>なか</sup> 命じたり、<sup>おき こ ひと い めい</sup> 其 <sup>そのかれ とら</sup> 彼 <sup>ひさ</sup> を <sup>なか</sup> 拘えし <sup>おき こ ひと い めい</sup> こと <sup>そのかれ とら</sup> 久し <sup>ひさ</sup> けれ

<sup>なか</sup> ば <sup>おき こ ひと い めい</sup> なり。彼 <sup>そのかれ とら</sup> を <sup>ひさ</sup> 守りて、<sup>なか</sup> 鐵索 <sup>おき こ ひと い めい</sup> と <sup>そのかれ とら</sup> 桎梏 <sup>ひさ</sup> とに <sup>なか</sup> 繋 <sup>おき こ ひと い めい</sup> ぎ <sup>そのかれ とら</sup> た <sup>ひさ</sup> れども、<sup>なか</sup> 彼 <sup>おき こ ひと い めい</sup> 繋 <sup>そのかれ とら</sup> を <sup>ひさ</sup> 斷ちて、<sup>なか</sup> 魔鬼 <sup>おき こ ひと い めい</sup> の <sup>そのかれ とら</sup> 爲 <sup>ひさ</sup> に <sup>なか</sup> 野 <sup>おき こ ひと い めい</sup> に <sup>そのかれ とら</sup> 逐 <sup>ひさ</sup> わ

<sup>なか</sup> れたり。イスス <sup>おき こ ひと い めい</sup> 彼 <sup>そのかれ とら</sup> に <sup>ひさ</sup> 問 <sup>なか</sup> いて <sup>おき こ ひと い めい</sup> 曰 <sup>そのかれ とら</sup> えり、<sup>ひさ</sup> 爾 <sup>なか</sup> の <sup>おき こ ひと い めい</sup> 名 <sup>そのかれ とら</sup> は <sup>ひさ</sup> 何 <sup>なか</sup> ぞ、<sup>おき こ ひと い めい</sup> 彼 <sup>そのかれ とら</sup> 曰 <sup>ひさ</sup> えり、<sup>なか</sup> 大 <sup>おき こ ひと い めい</sup> 隊 <sup>そのかれ とら</sup> 、<sup>ひさ</sup> 多 <sup>なか</sup> くの <sup>おき こ ひと い めい</sup> 魔鬼 <sup>そのかれ とら</sup> 彼 <sup>ひさ</sup> に <sup>なか</sup> 入

<sup>なか</sup> り <sup>おき こ ひと い めい</sup> た <sup>そのかれ とら</sup> れ <sup>ひさ</sup> ば <sup>なか</sup> なり。魔鬼 <sup>おき こ ひと い めい</sup> は <sup>そのかれ とら</sup> イスス <sup>ひさ</sup> に、<sup>なか</sup> 彼 <sup>おき こ ひと い めい</sup> 等 <sup>そのかれ とら</sup> に <sup>ひさ</sup> 淵 <sup>なか</sup> に <sup>おき こ ひと い めい</sup> 往 <sup>そのかれ とら</sup> く <sup>ひさ</sup> を <sup>なか</sup> 命 <sup>おき こ ひと い めい</sup> ぜ <sup>そのかれ とら</sup> ざ <sup>ひさ</sup> らん <sup>なか</sup> こと <sup>おき こ ひと い めい</sup> を <sup>そのかれ とら</sup> 求 <sup>ひさ</sup> め <sup>なか</sup> た <sup>おき こ ひと い めい</sup> り。彼 <sup>そのかれ とら</sup> 處 <sup>ひさ</sup> に <sup>なか</sup> 豕 <sup>おき こ ひと い めい</sup> の

<sup>おおむれ やま か</sup> 大 <sup>まき</sup> 群 <sup>かれら</sup> の <sup>ふち</sup> 山 <sup>ゆ めい</sup> に <sup>い</sup> 牧 <sup>ゆる</sup> わ <sup>もと</sup> れ <sup>かれこれ</sup> た <sup>おおむれ やま か</sup> る <sup>まき</sup> あり、<sup>かれら</sup> 魔鬼 <sup>い</sup> は <sup>ゆる</sup> 彼 <sup>もと</sup> に、<sup>かれこれ</sup> 其 <sup>おおむれ やま か</sup> 中 <sup>まき</sup> に <sup>い</sup> 入 <sup>ゆる</sup> る <sup>もと</sup> を <sup>かれこれ</sup> 許 <sup>おおむれ やま か</sup> さん <sup>まき</sup> こと <sup>い</sup> を <sup>ゆる</sup> 求 <sup>もと</sup> め <sup>かれこれ</sup> た <sup>おおむれ やま か</sup> れ <sup>まき</sup> ば <sup>い</sup> 彼 <sup>ゆる</sup> 之 <sup>もと</sup> を

<sup>ゆる</sup> 許 <sup>まき</sup> せ <sup>い</sup> り。魔鬼 <sup>むれ</sup> 人 <sup>がけ</sup> より <sup>みづうみ</sup> 出 <sup>か</sup> でて、<sup>おぼ</sup> 豕 <sup>か</sup> に <sup>か</sup> 入 <sup>か</sup> り <sup>ものあ</sup> し <sup>か</sup> に、<sup>か</sup> 群 <sup>か</sup> は <sup>か</sup> 山 <sup>か</sup> 坡 <sup>か</sup> より <sup>か</sup> 湖 <sup>か</sup> に <sup>か</sup> 逸 <sup>か</sup> けて <sup>か</sup> 溺 <sup>か</sup> れ <sup>か</sup> たり。牧 <sup>か</sup> う <sup>か</sup> 者 <sup>か</sup> 有

<sup>こと</sup> り <sup>み</sup> し <sup>はし</sup> 事 <sup>ゆ</sup> を <sup>まち</sup> 觀 <sup>むらむら</sup> て、<sup>つ</sup> 奔 <sup>ひと</sup> り <sup>ひと</sup> 往 <sup>ひと</sup> き <sup>ひと</sup> て、<sup>ひと</sup> 邑 <sup>ひと</sup> 及 <sup>ひと</sup> び <sup>ひと</sup> 諸 <sup>ひと</sup> 村 <sup>ひと</sup> に <sup>ひと</sup> 告 <sup>ひと</sup> げ <sup>ひと</sup> た <sup>ひと</sup> れ <sup>ひと</sup> ば、<sup>ひと</sup> 人 <sup>ひと</sup> 人 <sup>ひと</sup> 有 <sup>ひと</sup> り <sup>ひと</sup> し <sup>ひと</sup> 所 <sup>ひと</sup> を <sup>ひと</sup> 觀 <sup>ひと</sup> ん <sup>ひと</sup> 爲 <sup>ひと</sup> に <sup>ひと</sup> 出 <sup>ひと</sup> て、

<sup>きた</sup> イ <sup>まき</sup> ス <sup>い</sup> に <sup>ひと</sup> 來 <sup>ころも</sup> り <sup>き</sup> て、<sup>ころも</sup> 魔鬼 <sup>ころも</sup> の <sup>ころも</sup> 出 <sup>ころも</sup> で <sup>ころも</sup> た <sup>ころも</sup> る <sup>ころも</sup> 人 <sup>ころも</sup> が <sup>ころも</sup> 衣 <sup>ころも</sup> を <sup>ころも</sup> 着 <sup>ころも</sup> 、<sup>ころも</sup> 心 <sup>ころも</sup> 慥 <sup>ころも</sup> に <sup>ころも</sup> して、<sup>ころも</sup> イ <sup>ころも</sup> ス <sup>ころも</sup> の <sup>ころも</sup> 足 <sup>ころも</sup> 下 <sup>ころも</sup> に <sup>ころも</sup> 坐 <sup>ころも</sup> せ <sup>ころも</sup> る

<sup>み</sup> を <sup>おそ</sup> 見 <sup>み</sup> て、<sup>み</sup> 懼 <sup>み</sup> れ <sup>み</sup> たり。見 <sup>み</sup> し <sup>み</sup> 者 <sup>み</sup> は <sup>み</sup> 魔鬼 <sup>み</sup> に <sup>み</sup> 憑 <sup>み</sup> れ <sup>み</sup> た <sup>み</sup> る <sup>み</sup> 人 <sup>み</sup> の <sup>み</sup> 如 <sup>み</sup> 何 <sup>み</sup> に <sup>み</sup> 愈 <sup>み</sup> さ <sup>み</sup> れ <sup>み</sup> し <sup>み</sup> を <sup>み</sup> 告 <sup>み</sup> げ <sup>み</sup> た <sup>み</sup> れ <sup>み</sup> ば、<sup>み</sup> ガ <sup>み</sup> ダ <sup>み</sup> ラ <sup>み</sup> 地 <sup>み</sup> 方 <sup>み</sup>

<sup>たみ</sup> の <sup>みな</sup> 民 <sup>かれら</sup> は、<sup>はな</sup> 皆 <sup>こ</sup> イ <sup>おおい</sup> ス <sup>おそ</sup> に <sup>ゆえ</sup> 彼 <sup>かれ</sup> 等 <sup>ふね</sup> を <sup>のぼ</sup> 離 <sup>かえ</sup> れ <sup>かえ</sup> ん <sup>かえ</sup> こと <sup>かえ</sup> を <sup>かえ</sup> 請 <sup>かえ</sup> え <sup>かえ</sup> り、<sup>かえ</sup> 大 <sup>かえ</sup> に <sup>かえ</sup> 懼 <sup>かえ</sup> れ <sup>かえ</sup> し <sup>かえ</sup> 故 <sup>かえ</sup> な <sup>かえ</sup> り。彼 <sup>かえ</sup> 舟 <sup>かえ</sup> に <sup>かえ</sup> 登 <sup>かえ</sup> り <sup>かえ</sup> て <sup>かえ</sup> 返

<sup>まき</sup> れ <sup>い</sup> り。魔鬼 <sup>ひと</sup> の <sup>かれ</sup> 出 <sup>とも</sup> で <sup>お</sup> た <sup>もと</sup> る <sup>もと</sup> 人 <sup>もと</sup> は <sup>もと</sup> 彼 <sup>もと</sup> と <sup>もと</sup> 偕 <sup>もと</sup> に <sup>もと</sup> 居 <sup>もと</sup> ら <sup>もと</sup> ん <sup>もと</sup> こと <sup>もと</sup> を <sup>もと</sup> 求 <sup>もと</sup> め <sup>もと</sup> た <sup>もと</sup> れ <sup>もと</sup> ども、<sup>もと</sup> イ <sup>もと</sup> ス <sup>もと</sup> 之 <sup>もと</sup> を <sup>もと</sup> 去 <sup>もと</sup> ら <sup>もと</sup> し <sup>もと</sup> め <sup>もと</sup> て <sup>もと</sup> 曰 <sup>もと</sup> え

<sup>なんぢ</sup> り。爾 <sup>いえ</sup> の <sup>かえ</sup> 家 <sup>かみ</sup> に <sup>いか</sup> 歸 <sup>こと</sup> り <sup>おこな</sup> て、<sup>つ</sup> 神 <sup>かれ</sup> が <sup>ぜん</sup> 如 <sup>ぜん</sup> 何 <sup>ぜん</sup> なる <sup>ぜん</sup> 事 <sup>ぜん</sup> を <sup>ぜん</sup> 行 <sup>ぜん</sup> い <sup>ぜん</sup> し <sup>ぜん</sup> を <sup>ぜん</sup> 告 <sup>ぜん</sup> げ <sup>ぜん</sup> よ。彼 <sup>ぜん</sup> 往 <sup>ぜん</sup> き <sup>ぜん</sup> て、<sup>ぜん</sup> 全 <sup>ぜん</sup> 邑 <sup>ぜん</sup> に <sup>ぜん</sup> イ <sup>ぜん</sup> ス

<sup>かれ</sup> が <sup>いか</sup> 彼 <sup>こと</sup> に <sup>おこな</sup> 如 <sup>の</sup> 何 <sup>の</sup> なる <sup>の</sup> 事 <sup>の</sup> を <sup>の</sup> 行 <sup>の</sup> い <sup>の</sup> し <sup>の</sup> を <sup>の</sup> 宣 <sup>の</sup> べ <sup>の</sup> たり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 彼らはガリラヤの対岸、ゲラサ人の地に渡った。陸にあがられると、その町の人で、悪霊につかれて長いあいだ着物も着ず、家に居つかないで墓場にばかりいた人に、出会われた。この人がイエスを見て叫び出し、みまえにひれ伏して大声で言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。お願いです、わたしを苦しめないでください」。それは、イエスが汚れた霊に、その人から出て行け、とお命じになったからである。というのは、悪霊が何度も彼をひき捕えたので、彼は鎖と足かせとでつながれて看視されていたが、それを断ち切っては悪霊によって荒野

へ追いやられていたのである。イエスは彼に「なんという名前か」とお尋ねになると、「レギオンと言います」と答えた。彼の中にたくさんの悪霊がはいり込んでいたからである。悪霊どもは、底知れぬ所に落ちて行くことを自分たちにお命じにならぬようにと、イエスに願いつづけた。ところが、その山べにおびたしい豚の群れが飼ってあったので、その豚の中へはいることを許していただきたいと、悪霊どもが願い出た。イエスはそれをお許しになった。そこで悪霊どもは、その人から出て豚の中へはいり込んだ。するとその群れは、がけから湖へなだれを打って駆け下り、おぼれ死んでしまった。飼う者たちは、この出来事を見て逃げ出して、町や村里にふれまわった。人々はこの出来事を見に出てきた。そして、イエスのところにきて、悪霊を追い出してもらった人が着物を着て、正気になってイエスの足もとにすわっているのを見て、恐れた。それを見た人たちは、この悪霊につかれていた者が救われた次第を、彼らに語り聞かせた。それから、ゲラサの地方の民衆はこぞって、自分たちの所から立ち去ってくださるようにとイエスに頼んだ。彼らが非常な恐怖に襲われていたからである。そこで、イエスは舟に乗って帰りかけられた。悪霊を追い出してもらった人は、お供をしたいと、しきりに願ったが、イエスはこう言って彼をお帰しになった。「家へ帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、語り聞かせなさい」。そこで彼は立ち去って、自分にイエスがして下さったことを、ことごとく町中に言いひろめた。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③（金口イオアン聖体礼儀）へ